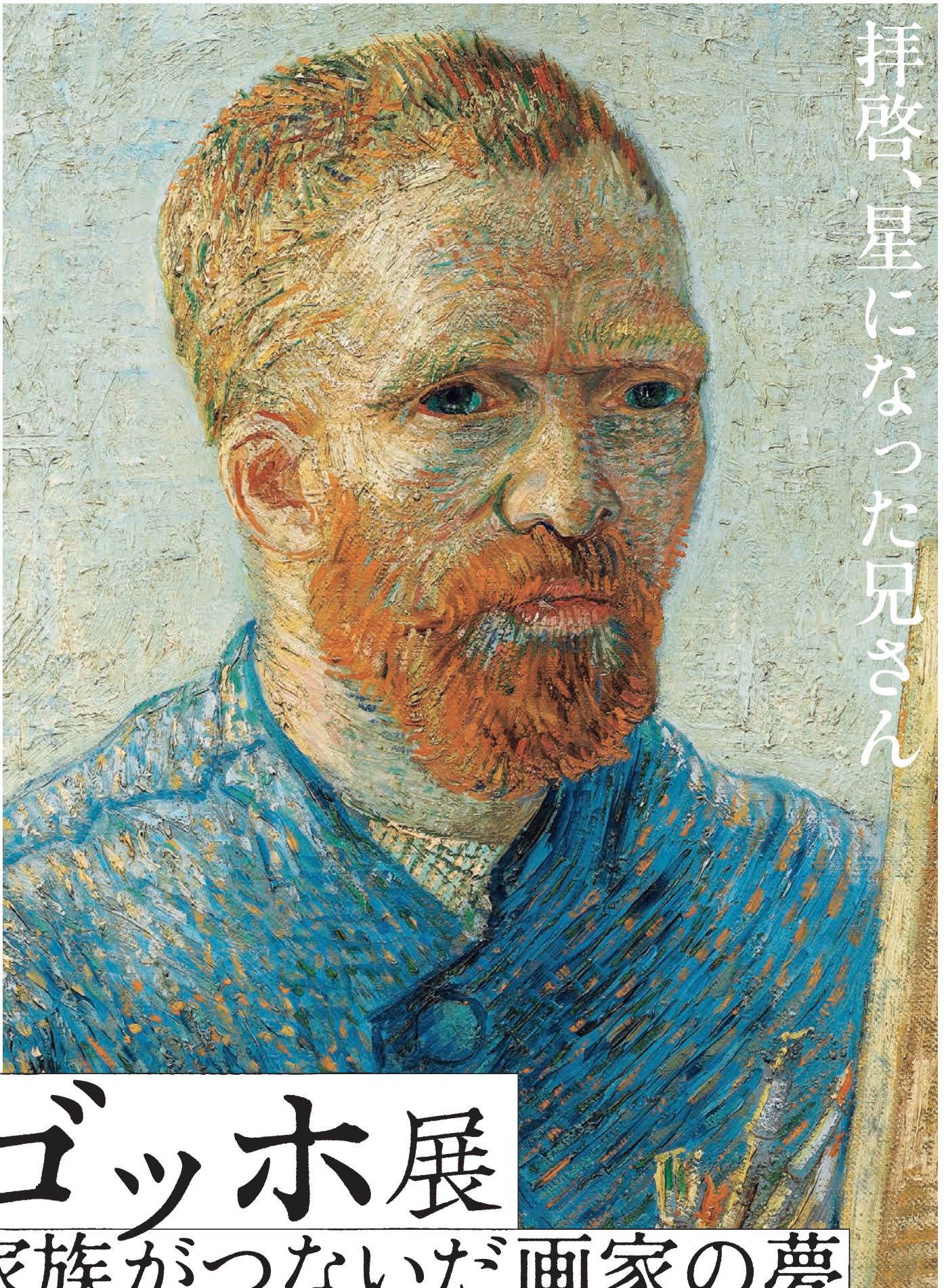


拝啓、星になつた兄さん



フィンセント・ファン・ゴッホ（画家としての自画像）部分
1887年12月-1888年2月
ファン・ゴッホ美術館、アムステルダム（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）
Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)

ゴッホ展

家族がつないだ画家の夢

Van Gogh's Home: The Van Gogh Museum.

The Painter's Legacy, the Family Collection, the Ongoing Story

PRESS RELEASE

Van
Gogh
Museum
Amsterdam

フィンセント・ファン・ゴッホ(1853-1890)の作品は、今日までどのように伝えられてきたのでしょうか。本展は、ファン・ゴッホ家が受け継いできたファミリー・コレクションに焦点を当てます。

フィンセントの画業を支え、その大部分の作品を保管していた弟テオは兄の死の半年後に生涯を閉じ、テオの妻ヨーが膨大なコレクションを管理することとなります。ヨーは義兄の作品を世に出すことに人生を捧げ、作品を展覧会に貸し出し、販売し、膨大な手紙を整理して出版するなど、画家として正しく評価されるよう奔走しました。テオとヨーの息子フィンセント・ウィレムは、コレクションを散逸させないためにフィンセント・ファン・ゴッホ財団を設立し、美術館の開館に尽力します。人びとの心を癒す絵画に憧れ、100年後の人びとにも自らの絵が見られることを期待した画家の夢も、数々の作品とともにこうして今日まで引き継がれてきました。

本展では、ファン・ゴッホ美術館の作品を中心に、ファン・ゴッホの作品30点以上に加え、日本初公開となるファン・ゴッホの貴重な手紙4通なども展示します。現在のファン・ゴッホ美術館の活動も紹介しながら、本展をとおして、家族の受け継いできた画家の作品と夢を、さらに後世へと伝えてゆきます。

1

ファン・ゴッホ家のコレクションに焦点を当てた日本初の展覧会

2

30点以上のファン・ゴッホ作品で初期から晩年までの画業をたどる

3

ファン・ゴッホが集めた作品や、
初来日となるファン・ゴッホの手紙4通を展示

外観



オランダ・アムステルダムにあるファン・ゴッホ美術館には、フィンセント・ファン・ゴッホの約200点の油彩画や500点にのぼる素描をはじめ、弟テオに宛てた手紙や関連する画家の作品、フィンセントが集めた日本の浮世絵などが所蔵されている。そのほとんどは1973年の開館時に、テオの息子フィンセント・ウィレムが創設したフィンセント・ファン・ゴッホ財団から永久貸与されたものである。当初の建物はヘリット・リートフェルトによる設計で、1999年には黒川紀章による新館が開館した。世界中から多くの鑑賞者を迎えるだけでなく、ファン・ゴッホ研究の拠点ともなっている。

ファン・ゴッホ
美術館

内観



メインエントランス

いずれも2015年撮影



監修者

シラール・ファン・ヒューフテン Sjraar van Heugten

私にとって本展覧会はフィンセント・ファン・ゴッホ作品の新たな見方を日本の皆様に紹介する5回目の機会にあたります。これまでのうち1回目以外は私が監修を務めました。まず「ゴッホ展——孤高の画家の原風景」(2005年)では、ファン・ゴッホが文学や宗教、先人や同時代の芸術家の作品、そして日本美術などからさまざまなインスピレーションを得たことが示されました。「没後120年ゴッホ展 こうして私はゴッホになった」(2010年)では、ファン・ゴッホの作風と技法の発展、さらにアトリエでの制作作業について新たな知見を取り上げました。「ゴッホとゴーギャン展」(2016年)では、偉大な画家同士であり友人でもあったファン・ゴッホとポール・ゴーギャンの芸術面での関係性が、多角的な視点から改めて日本の人々に紹介されました。

4回目の「ゴッホ展——響きあう魂 ヘレーネとフィンセント」(2021年)では、ヘレーネ・クレラー=ミュラーが収集したファン・ゴッホ・コレクションの全容を、クレラー=ミュラー美術館に所蔵されている主要作品によって示しました。ヘレーネは1908年以降、当時の前衛芸術家の作品を幅広く収集し、特にファン・ゴッホの作品を好み、その世界最大の個人収集家となった人物です。そうすると、次に5回目の展覧会として、アムステルダムファン・ゴッホ美術館に所蔵されている世界最大のファン・ゴッホ・コレクションとして、ファン・ゴッホ家のコレクションを取り上げるのは、ごく自然な流れでした。

本展では、芸術への強い愛を共有した兄弟、フィンセントとテオの足跡から始まり、彼らの想像をはるかに超えて展開した物語の全体像を余すところなく紹介します。彼ら2人が若くして亡くなった後、大半のフィンセントの油彩画と素描、そして彼らが収集していた他の芸術家の作品は、テオの未亡人ヨー・ファン・ゴッホ=ボンゲルと、その息子フィンセント・ウィレム・ファン・ゴッホに相続されました。この物語の中心となるのは、ファン・ゴッホ家が受け継いだコレクションの歩み、フィンセントの名声を確立するためにヨーが重ねた努力、そしてフィンセント・ウィレムがコレクションを守る拠点としてまずフィンセント・ファン・ゴッホ財団を設立し、その後ファン・ゴッホ美術館を創設した経緯です。また、1973年の開館以来、ファン・ゴッホ美術館が歩んできた発展の道のりや、その間に収集された作品群も、本展で取り上げる重要なテーマとなっています。

日本の皆様からは、常にフィンセント・ファン・ゴッホの芸術への深い敬愛の念が感じられます。本展に来場された方々は、ファン・ゴッホや関係する芸術家の作品から新たなインスピレーションを得るだけでなく、世界最大のファン・ゴッホ・コレクションがどのようにひとつのまとまりとして維持され、そして美術を愛する皆様のために可能な限り多くの機会を設けて公開されるに至ったのか、その物語をお楽しみいただければと思います。

略歴

シラール・ファン・ヒューフテン(1957年生まれ)は、ユトレヒト大学で美術史を学ぶ。1988年から2010年までファン・ゴッホ美術館に勤務し、在職中の最後の11年間はコレクション部門の責任者を務める。2010年に美術史家として独立。主にファン・ゴッホとその同時代の芸術家について多くの書籍や論文を発表している。その中にはファン・ゴッホ美術館が所蔵するファン・ゴッホの素描作品図録全3巻(第3巻は共著)がある。2012年にはトリトン・コレクション財団の所蔵作品について書籍を出版。アルル・フィンセント・ファン・ゴッホ財団美術館での3展覧会(2014年、2015年、2016年)のほか、ベルギーのモンスで開催された「ボリナージュ時代のゴッホ——画家の誕生」(2015年)、クラーク美術館(アメリカ・ウィリアムズタウン)の「ゴッホと自然」(2015年)、メルボルンのヴィクトリア国立美術館の「ゴッホと四季」(2017年)のキュレーションを務めた。日本での展覧会は2010年、2016年、2021年に続く4回目の監修となる。

この展覧会が皆さんにとって興味深く、
そして刺激的な体験となることを願っている。

フィンセント・ファン・ゴッホ財団理事長

ヤンティンス・ファン・ゴッホ Jantine van Gogh

アムステルダムにフィンセント・ファン・ゴッホ美術館が存在すること。それは今ではごく普通のことであり、むしろそれが無いことを想像しにくいかもしれません。当美術館には多くの芸術作品、なんといってもフィンセントの約200点の絵画、500点の素描、900通の手紙が収蔵・研究・保存され、そしてこれが最も大事なことです。が、一般の皆さんのために公開されています。

このように当たり前の存在になったファン・ゴッホ美術館もそこに至るまでは長い道のりがありました。その歴史と関わった人々については、今回の壮大な展覧会でさらに詳しく知ることができるでしょう。

1890年にフィンセントが亡くなってから1973年にファン・ゴッホ美術館が開館するまでの間、ファン・ゴッホ家のコレクションの大部分は私の先祖の家々で「暮らして」いました。その中には、《ヒマワリ》や《花咲くアーモンドの枝》のように現在では代表作と考えられているものも含まれていました。

今は本当に時代が変わりました！私やほかの家族が一族のコレクションにあるフィンセントの作品を見たと思えば、皆さんと同じようにファン・ゴッホ美術館へ行きます。あるいは、ちょうどこれから皆さんがご覧になるような展覧会に行き、楽しむのです。

フィンセント・ファン・ゴッホ財団の理事長として、この展覧会が皆さんにとって興味深く、そして刺激的な体験となることを願っています。

日本で初めて、ファン・ゴッホ家とファン・ゴッホ美術館の
驚くべき歴史を皆さまにご紹介できることを大変嬉しく思う。

ファン・ゴッホ美術館館長

エミリー・ゴードンカー Emilie Gordenker

ファン・ゴッホ美術館のような場所は世界を探してもほかにありません。フィンセント・ファン・ゴッホ作品の世界最大級のコレクションを誇り、現存するほとんどの手紙や同時代の芸術家による多くの作品を収蔵している当美術館は、ファン・ゴッホについての国際的な研究拠点であると同時に、先進的な教育センターでもあります。しかし、最初からそうだったわけではなく、開館して50年の間に驚くほどの変貌を遂げたのです。草創期の小さな施設から、今ではフィンセントやその家族が夢にさえ見なかったほどの多くの来館者を集める有名美術館へと成長しました。現在では、研究と美術館運営の両面において国際的に見ても最高水準の模範として、フィンセントの芸術、人生、そして彼が生きた時代を物語ることで、世界中の人々の想像力をかき立てています。

このたび、私たちは日本で初めて、ファン・ゴッホ家とファン・ゴッホ美術館の驚くべき歴史を皆さまにご紹介できますことを大変嬉しく思います。絵画、素描、手紙の豊富なコレクションに加え、フィンセントとテオ自身が所有していたコレクションや、時代や背景を理解いただくための近年の収蔵品も取り入れながら、その全容をお伝えいたします。





フィンセント・ファン・ゴッホ

《画家としての自画像》

1887年12月-1888年2月
油彩、カンヴァス

ファン・ゴッホ美術館、アムステルダム
(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)
Van Gogh Museum, Amsterdam
(Vincent van Gogh Foundation)

1890年5月17日、ヨー・ファン・ゴッホ=ボンゲルはパリで初めてフィンセント・ファン・ゴッホと会った。病気と聞いて想像していた姿と異なり、たくましく健康的な様子に驚いたという。ヨーはすべての自画像のなかでも、本作の姿がこのときの印象によく似ていると回想している。

ファン・ゴッホはパリで本作を描いたのち、南仏アルルへ移った。テオのもとに置いてきたこの自画像について、妹に伝えた手紙が残っている。彼は自らの表情について、「ピンクがかった灰色の顔」は「生氣がなくこわばっていて、赤ヒゲが伸びたまま物悲しい」と書き記した。

この自画像からどのような印象を受け取るか、ぜひ会場で実際に作品と向き合ってもらいたい。いずれにせよ、2年間のパリ時代終盤に描かれた本作が、その集大成といえる自画像であることに変わりはない。パリで身につけた筆づかい、補色を効果的に用いた豊かな色彩表現にもぜひ注目していただきたい。

第1章

ファン・ゴッホ家のコレクションからファン・ゴッホ美術館へ



*1
フィンセント・ファン・ゴッホ
(1853-1890)



*1
テオドルス・ファン・ゴッホ
(愛称テオ、1857-1891)
フィンセントの弟



*1
ヨハンナ・ファン・ゴッホ=ボンゲル
(愛称ヨー、1862-1925)
フィンセントの義妹



*2
フィンセント・ウィレム・ファン・ゴッホ
(愛称エンジニア、1890-1978)
フィンセントの甥

1889年	4月、テオとヨーが結婚する
1890年	7月29日、フィンセントがテオに看取られ37歳で死去
1891年	1月25日、テオが33歳で死去 フィンセントとテオのコレクションはヨーと息子フィンセント・ウィレムが相続し、ともにオランダへ渡る
1905年	没後最大の回顧展がアムステルダムで開催される
1914年	ヨー、テオに宛てたフィンセントの書簡集を出版 テオの墓がフィンセントの眠るオーヴェール=シュル=オワーズに移される
1924年	ヨー、ロンドン・ナショナル・ギャラリーに《ヒマワリ》を売却
1925年	ヨー死去。フィンセント・ウィレムがすべてのコレクションを相続 数年後、フィンセント・ウィレムが作品の販売をやめる
1960年	フィンセント・ファン・ゴッホ財団設立
1962年	大部分のコレクションが財団に移される
1973年	国立フィンセント・ファン・ゴッホ美術館開館



本展でご紹介するファン・ゴッホ家のコレクションの歴史は、フィンセント・ファン・ゴッホの死後、その作品の大半を弟テオが受け継いだところから始まります。本章では、コレクションを継承し、フィンセントの作品を世界へ広めることに貢献した3人の家族をご紹介します。

テオドルス・ファン・ゴッホ

愛称テオ、1857-1891

フィンセントの弟。画家になると決意した兄を経済的・精神的に支え続けた。1873年、15歳で伯父の紹介により美術商グーピル商会のブリュッセル支店で働き始め、ハーグ、ロンドン勤務を経て、1879年にパリへ移る。印象派をはじめとする前衛的な美術にも高い関心を持ち、フィンセントの芸術観にも影響を与えた。支援に対して兄からはその成果が送られ、彼のアパートマンはフィンセントの作品で溢れかえていたという。フィンセントの死後、回顧展の開催に奔走するも、体調が悪化し、兄の半年後に死去。テオの遺産には、数多くのファン・ゴッホ作品に加え、兄弟で収集したほかの画家の作品や浮世絵、フィンセントからの多数の手紙が含まれていた。

ヨハンナ・ファン・ゴッホ=ボンゲル

愛称ヨー、1862-1925

フィンセントの義妹。オランダの中流家庭に生まれる。オランダで英語教師や翻訳家として働いた後、兄の友人だったテオのプロポーズを受けて1889年4月に結婚。パリで新婚生活を送りながら、美術への造詣を深めた。1891年1月のテオの死により帰国。テオの財産の半分以上を相続し、このとき1歳に満たなかった息子が21歳になる1911年まで、彼の相続分も管理していた。展覧会への貸出に加え、定期的に作品を売却したが、親子の生計のためだけでなく、フィンセントの評価の確立を目的としたものでもあった。テオへ宛てられた膨大な手紙を整理し1914年に出版。死去する前年1924年には、ロンドンのナショナル・ギャラリーのために《ヒマワリ》を手放し、フィンセントの名声を確認したものとした。

フィンセント・ウィレム・ファン・ゴッホ

愛称エンジニア、1890-1978

テオとヨーの息子でフィンセントの甥。フィンセントは彼の誕生を祝って《花咲くアーモンドの枝》を描いて贈った。フィンセントの作品に囲まれて育ち、エンジニアの職に就いた。ファン・ゴッホ家のコレクションに深く関わるようになるのは1945年以降のことである。ヨーの死後数年経つと作品販売を止め、一家のコレクションが散逸せず保持されるよう尽力した。1960年にフィンセント・ファン・ゴッホ財団を設立し、1962年にコレクションの大部分の所有権を財団に移譲した。財団は、美術館に膨大なコレクションを永久貸与することを約束し、アムステルダム市から土地の提供を受け、オランダ政府が美術館を建設。1973年に国立フィンセント・ファン・ゴッホ美術館(現ファン・ゴッホ美術館)を開館させた。

左:ヨハンナ・ファン・ゴッホ=ボンゲル 中央:アンナ・コルネリア・カルベントゥス(ヨーの義母)
右:フィンセント・ウィレム・ファン・ゴッホ

第2章

フィンセントとテオ、ファン・ゴッホ兄弟のコレクション

兄弟のコレクションは、ふたりが生きた時代の雰囲気を伝えてくれるとともに、フィンセントの芸術を理解する大きな手がかりとなります。フィンセントとテオはともに十代半ばから画廊で働き始めていて、手頃な価格のグラフィック・アートは若いころから身近なものでした。彼らは版画（オリジナル、複製含む）を買い、ときに贈り合います。画家になる決意をしたフィンセントは、特にフランスやイギリスの雑誌に掲載された挿絵から大きな影響を受けました。

パリでは同時代の美術も収集します。フィンセントが自らの作品と交換で手に入れた作品は、このとき彼が画家仲間から得ていた評価を示すものもあります。浮世絵を熱心に購入したのは主にフィンセントで、芸術的な刺激を受けるだけでなく、すでに値が上がっていた印象派の主要画家の作品を、これらと交換で何とか手に入れようと意図したものでもありました。

肩越しにこちらを見る画家を描いた、フィンセントお気に入りの肖像画。サン＝レミの療養院からテオに送った手紙では、「ラッセルが描いた僕の肖像を大切に扱ってほしい。僕にとってとても重要なものだ」と頼んでいる。本作の代わりにラッセルに贈られたのは、パリで描いた3足の靴の静物画だと考えられている。ラッセルはオーストラリア出身の画家で、ファン・ゴッホはパリで彼と出会い親しくなり、南仏に移ったあとも交流が続いていた。

ジョン・ピーター・ラッセル
《フィンセント・ファン・ゴッホの肖像》
1886年 油彩、カンヴァス



見事に咲く、生命力に溢れるタチアオイが主役の作品。フィンセントはクオストの描くタチアオイを高く評価し、南仏で制作している際には、そのように自分もヒマワリを描きたいと考えていた。オーヴェール滞在中の手紙からは、クオストに会いにパリに行き、彼の作品を手に入れようとしていたことがわかっている。本作の裏面には「テオ・ファン・ゴッホへ／私の友人フィンセントがこのうえなく愛するこの絵を」と記されている。

エルネスト・クオスト
《タチアオイの咲く庭》
1886-90年 油彩、板



ポール・ゴーガン
《雪のパリ》
1894年 油彩、カンヴァス

1893年、2年間のタヒチ滞在から戻ったゴーガンが、パリでアトリエの窓から見える雪景色を描いた作品。陽が差し込み、雪化粧した都会の一角が生き生きと美しく描かれている。本作は兄弟のコレクションではなくヨーに由来する。ゴーガンは南仏アルルでファン・ゴッホと2ヵ月を過ごした。彼は自らの所有であるファン・ゴッホ作品3点について、オランダのヨーに連絡をとって返却を受けた。本作はその感謝の印としてヨーに贈られた作品のひとつとされる。

三代歌川豊国(歌川国貞)
《花源氏夜の佛》
1861年(文久元)
大判錦絵三枚続

ファン・ゴッホは、新しい表現様式を確立する際に日本美術を参照し、またその思想からも大きな影響を受けた。アルルでは浮世絵をアトリエに飾り、テオに次のように書き送った。「考えてみてほしい。あの日本人たちが僕たちに教えてくれることは、まるで新しい宗教のように思えないだろうか。あれほど質素に自然の中で暮らしている。まるで彼ら自身が野に咲く花のようではないか。僕には、日本美術を学びさえすれば、あのようにもっと幸福で陽気な気分になるはずだと思えるし、それによって教育や慣習に縛られている僕たちでも自然に立ち返ることができるのだ」。



第3章

フィンセント・ファン・ゴッホの絵画と素描

フィンセント・ファン・ゴッホが画家になる決意をしたのは比較的遅く、1880年、27歳のときでした。最初の3年間は主にハーグで素描の腕を磨き、その後ニューネンで油彩画に取り組みます。1886年にパリに出ると、自らの表現が時代遅れであることに気づき、新しい筆づかいと色彩表現を取り入れ、独自の様式を生み出していきました。1888年2月に南仏に移り、アルルで1年3ヵ月、サン=レミ=ド=ブロヴァンスで1年を過ごし、自らの表現様式を確立しました。1890年5月にパリ近郊のオーヴェール=シュル=オワーズへ移ります。新しい芸術の可能性を試み続けていましたが、自らの胸部をピストルで撃ち、7月29日に37歳で息を引き取ります。わずか10年という短い画業で驚くほどの数の作品を制作しました。

ファン・ゴッホ家が受け継いできた200点を超える絵画、500点以上の素描・版画は、現在ファン・ゴッホ美術館に保管され、世界最大のファン・ゴッホ・コレクションとなっています。



フィンセント・ファン・ゴッホ
《グラジオラスとエゾギクを生けた花瓶》
1886年8-9月 油彩、カンヴァス

パリに出て、印象派の作品を初めて実際に目にしたファン・ゴッホは、新しい色彩と筆づかいを習得するのを感じた。色彩の実験のために花の静物画を繰り返し描き、1886年の夏には30点以上を制作した。本作ではすでに色調が明るくなってきている。注目すべきは筆づかいで、背景は十字を重ねるようであり、花々はやや厚塗りで描き分けられ、グラジオラスという名の由来となったという鋭い葉やつぼみには勢いある筆触が認められる。

パ
リ

1886年	2月28日頃、テオを頼ってパリに移り住む 3月初め、フェルナン・コルモンのアトリエに登録する ここでベルナールやトゥールーズ=ロートレックと会う
1887年	11-12月、ゴーガンと出会う
1888年	2月19日、パリを出発して南仏に向かう

オランダ



フィンセント・ファン・ゴッホ
《女性の頭部》
1885年4月 油彩、カンヴァス

画業の初め、ファン・ゴッホは農民を描く画家になることを目指し、何十点もの習作を重ねた。これらはオランダ時代の代表作《ジャガイモを食べる人々》に結実するが、本作もそのひとつである。この頃、ファン・ゴッホは本から学んだ色彩理論をさまざまなかたちで実践していた。本作においても補色の効果が試みられている。色調が暗いためわかりにくいですが、顔や帽子の赤みがかった色調が、衣服など随所に見られる緑とコントラストを生み出すよう配されている。

フィンセント・ファン・ゴッホ
《モンマルトル：風車と菜園》
1887年3-4月
油彩、カンヴァス



1853年	オランダ南部のフロート・ズンデルトに生まれる
1869年	グービル商会ハーグ支店で働き始める (76年解雇)
1872年	現存するテオ宛ての最初の手紙が書かれる
1880年	画家となる決意をし、ブリュッセルで美術の勉強を始める
1881年	4月末、家族の住むエッテンに移る 12月末、父親と口論になりハーグに移り住む
1883年	ニューネンに移った両親のもとで暮らし始める



フィンセント・ファン・ゴッホ
《ルナリアを生けた花瓶》
1884年秋-冬 油彩、カンヴァス

色彩理論への関心を高めたファン・ゴッホは、色彩を扱う訓練に適していると、それまで積極的に描いてこなかった静物画も手掛けるようになる。1884年の晩秋から初冬にかけて植物の静物画を初めて制作した。本作では、ルナリアと紅葉した数種の葉が組み合わされている。ルナリアは花ではなく、秋になると見られる銀白のさやをつけた様子が描かれている。硬貨のような独特の外観をもつこの植物を、ファン・ゴッホは憂鬱と告別に関連づけていた。

ファン・ゴッホは、パリのような大都会においてもものどかなモチーフを好み、喧噪を感じさせないモンマルトルを好んで描いた。緑は少なく、木々もまだ裸の春先の風景で、畑ではふたりの人物が農作業に動んでいる。奥に見えるのはブリュット=ファンと呼ばれた風車で、この展望台からはパリを一望することができた。明るい色調と、パリで身につけた軽やかな点描技法を使って、おだやかな春の一日が描かれている。



フィンセント・ファン・ゴッホ
《浜辺の漁船、サント=マリー=ド=ラ=メールにて》
1888年6月 油彩、カンヴァス

南仏アルルに居を定めたファン・ゴッホは、1888年5月末から6月初めにかけてサント=マリー=ド=ラ=メールという小さな漁村を訪れた。オランダ時代から海景画を手がけていたファン・ゴッホにとって、地中海はかねてからの憧れであった。本作は現地でのスケッチをもとにアルルで描かれた。スケッチには色の名も書き添えられ、油彩での制作が念頭にあったことがわかる。大胆な遠近法、平面的な色彩の扱いは、浮世絵からの影響を感じさせる。

アルル



1888年 2月20日、南仏アルルに到着
5月1日、「黄色い家」を借りる
10月23日、ゴーガンとの共同生活が始まる
12月23日、最初の激しい発作を起こし、左耳を切る

フィンセント・ファン・ゴッホ
《耕された畑（「畝」）》
1888年9月 油彩、カンヴァス

収穫を終えた畑を次の作物のために耕す初秋の風景。ファン・ゴッホは、めぐりゆく季節と、それとともに繰り返される農作業の様子を好んで描いている。馬を引き耕作する人物が見えるが、画面のほぼ半分を占めるのは耕される大地そのものである。画家自らが付けた「畝」というタイトルが物語るとおり、人の手の入った自然の素朴な美しさがこの絵画の主題であろう。画家自ら乾くの時間にしかかると書き残しているように、絵具が厚く盛られている。

フィンセント・ファン・ゴッホ
《種まく人》
1888年11月 油彩、カンヴァス

ゴーガンと共同生活していた時期の作品。色彩を面で表すような表現にその影響が色濃く感じられるが、平板な色面ではなく、独自の大胆な筆づかいが見られ、絵具も厚く塗られている。画家ミレーに憧れ、彼の描いた「種まく人」を自らも描きたいと試行錯誤を繰り返し、本作の構図にたどり着いた。補色の組み合わせであるが落ち着いた色調で、秋の夕暮れがよく表されている。後光のように配された大きな太陽が、農作業をする人物に威厳を与えている。





フィンセント・ファン・ゴッホ
《木底の革靴》
1889年秋 油彩、カンヴァス

画家になる決意をした頃のファン・ゴッホは、ミレーを手本とし、農民の生活に根ざし、農民を描く画家になりたいと考えていた。ミレーの伝記を読み、質素だがぬかるみにも強い木底の靴を履く生き方に共感していた。本作はサン＝レミの療養院で描かれたもので、彼は体調が良いときには近くのオリーブ園や糸杉の見える風景へ分け入った。この革製の木底の靴を履いて、南仏らしい自然のモチーフを求め、美しい田舎を散策したのだった。

サン＝レミ

1889年	5月8日、サン＝レミのサン＝ポール＝ド＝モーゾール療養院へ自ら入院する
1890年	1月、美術批評家アルベール・オーリエがファン・ゴッホの評論を発表
	5月16日、サン＝レミを出る
	5月17日、パリでテオとヨー、彼らの息子に会う
	5月20日、オーヴェール＝シュル＝オワーズに着く
	7月27日、ピストルで自らを撃ち、29日死去



フィンセント・ファン・ゴッホ
《羊毛を刈る人(ミレーによる)》
1889年9月 油彩、カンヴァス

ファン・ゴッホは1889年7月中旬から8月末まで発作に苦しんだ。9月には回復し、徐々に制作を再開した。この頃、新たな表現を確立しようと尊敬する画家の作品を油彩で模写することに精力的に取り組み、翌年の春までには本作を含む28点を制作している。模写とはいえ人物を描くことができ、白黒の版画を手本としたため色彩も自由に実験することができた。こうした制作はファン・ゴッホに喜びをもたらし、つらい状況のなかで彼の慰めとなるものであった。



フィンセント・ファン・ゴッホ
《オリーブ園》
1889年11月 油彩、カンヴァス

1889年秋、ファン・ゴッホが最も力を入れて取り組んだのがオリーブ園であった。糸杉と同じく、彼は南仏を表す樹木としてオリーブを重要なモチーフと位置づけ、オリーブ園の絵画を少なくとも15点制作した。テオ宛ての手紙によると、寒いがとても美しく澄んだ日差しの中で、本作を含む5点を生み出したという。本作は様式化が進んだ例のひとつで、オリーブの木々がリズムミカルに配され、無数の短い筆触が並置されるように描かれている。



フィンセント・ファン・ゴッホ

《農家》

1890年5-6月 油彩、カンヴァス

サン＝レミを離れたファン・ゴッホは、パリを経由して1890年5月20日にオーヴェールに移り住んだ。到着の2日後には古い藁ぶき屋根の習作を描き始める。テオへの手紙では村の家々の美しさを伝え、「オーヴェールはたしかにとっても美しい」、「ここはとても色彩が豊かだ」と記している。ひなびた農家は、オランダ時代から関心をもち続けていたモチーフであった。本作では、庭のふたりの人物と質素で荒廃した小屋がすばやくおおまかに描かれている。

オーヴェール シュール＝オワーズ

フィンセント・ファン・ゴッホ

《麦の穂》

1890年6月 油彩、カンヴァス

なだらかな丘陵と麦畑の広がるオーヴェールに着いたとき、ファン・ゴッホは敬愛する画家たちが表現した「麦の声」を感じたという。そして制作に着手し、一本一本の麦のかたちや色彩を入念に観察した。《麦の穂》を描く難しさは、ゴーガンに宛てた手紙(未送付)にも「このように麦の習作を試みているが、うまく描けない」とスケッチを添えて語られている。オーヴェールでは新しい肖像画にも取り組み、麦と肖像画を組み合わせた作品へと展開させた。



フィンセント・ファン・ゴッホ関連地図



第4章

ヨー・ファン・ゴッホ=ボンゲルが売却した絵画

ヨーはテオと結婚する前には特に美術に縁があったわけではありませんでした。パリでテオと暮らしながら、しだいにファン・ゴッホをはじめとする近現代美術に関する知識を身につけました。テオから膨大な作品を受け継いだのちには、個人収集家や美術館の世界、美術取引の仕組みについても精通してゆきます。ヨーが定期的に作品を売却したのは、親しが生計を立てるためでもありましたが、フィンセント・ファン・ゴッホの評価を確立するという大きな目的のためでもありました。こうしたヨーの尽力を明らかにするのが、テオとヨーの会計簿です。テオの死後には作品の売却についても記されるようになり、ヨーがどの作品をいつ誰にいくらで売却したのか、生々しい記録が残されました。会計簿の調査・研究は進み、記載されたもののうち、170点以上の絵画と44点の紙作品が特定されています。

フィンセント・ファン・ゴッホ《モンマルトルの菜園》
1887年 油彩、カンヴァス アムステルダム市立美術館

現在はアムステルダム市立美術館に収蔵される作品。アムステルダム市立美術館では、1905年に470点以上の作品によるファン・ゴッホの個展が開催されており、この大規模な回顧展は画家の評価を確立する大きな礎となった。本作はパリで描かれた作品のひとつで、まだ田舎の趣がのこるモンマルトルの穏やかな風景が捉えられている。ヨーが記した会計簿には、1914年4月6日、12,000ギルダーで売却されたことが記録されている。

テオ・ファン・ゴッホ、ヨー・ファン・ゴッホ=ボンゲル
『テオ・ファン・ゴッホと
ヨー・ファン・ゴッホ=ボンゲルの会計簿』
1889-1925年
ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）
Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)
※会場ごとにページ替えあり

当初は夫婦の家計簿で、1889年に新婚のテオとヨーが使い始めた。食料品の購入や洗濯女への支払いなど日々の支出に加え、テオから兄フィンセントへの毎月の送金額や画材の購入についても記録されている。テオの死後、会計簿はヨーが引き継ぎ使い続けた。ヨーがファン・ゴッホ作品の売却を細かく記録したことで、ファン・ゴッホ研究にとっても極めて貴重な資料となった。



第5章

コレクションの充実 作品収集



Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)
(purchased with support from the Mondriaan Fund,
the Ministry of Education, Culture and Science,
the VSBfonds and the Cultuurfonds)

フィンセント・ファン・ゴッホ
「傘を持つ老人の後ろ姿が描かれたアントン・ファン・ラッパルト宛ての手紙」
1882年9月23日頃 ペン、インク、紙
ファン・ゴッホ美術館、アムステルダム（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）

ファン・ラッパルトは、ファン・ゴッホがブリュッセルで出会った先輩画家で、ふたりは手紙で自らの制作や雑誌に掲載された挿絵など、美術の話題を語り合った。この手紙でファン・ゴッホは、救貧院の男を描くことに忙しいと述べ、そのスケッチを付している。本展で展示するファン・ラッパルト宛ての4通の手紙は長らく所在不明で、2006年に個人コレクションで発見された。ファン・ゴッホの手紙には質の悪い紙が使われていることが多く、また色褪せしやすいインクで書かれているため、実物が展示されることはめったになく、今回の出品は極めて貴重な機会となる。

ポール・シニャック

《フェリシテ号の浮桟橋、アニエール（作品143）》

1886年 油彩、カンヴァス

ファン・ゴッホ美術館、アムステルダム

シニャックは新印象派を代表する画家で、ファン・ゴッホとはパリのタンギーの画材店で出会ったという。ふたりはよくパリ近郊のセヌ川沿いの町に出かけ、ともに制作をした。シニャックの影響を受け、この時期ファン・ゴッホも短い筆触を多用している。本作に見られるように、シニャックは厳格に均一な筆触を用いたわけではない。左側の船の帆や空などは細かいが前景の川はやや大きく、こうした違いが画面に奥行きをもたらしている。



Van Gogh Museum, Amsterdam (purchased with support from the VriendenLoterij, the Rembrandt Association, with the additional support from its Themafonds Impressionisme/ Claude Monet Fonds, Het Liesbeth van Dorp Fonds and Themafonds 19de-eeuwse Schilderkunst, the Mondriaan Fund, and the members of the Yellow House Circle)

1973年、ファン・ゴッホ美術館は主にフィンセント・ファン・ゴッホ財団のコレクションを展示する美術館として開館しました。ファン・ゴッホ作品と家族に受け継がれてきたほかの画家たちの作品を中心としながら、今日までにそのコレクションは少しずつ拡充されてきました。

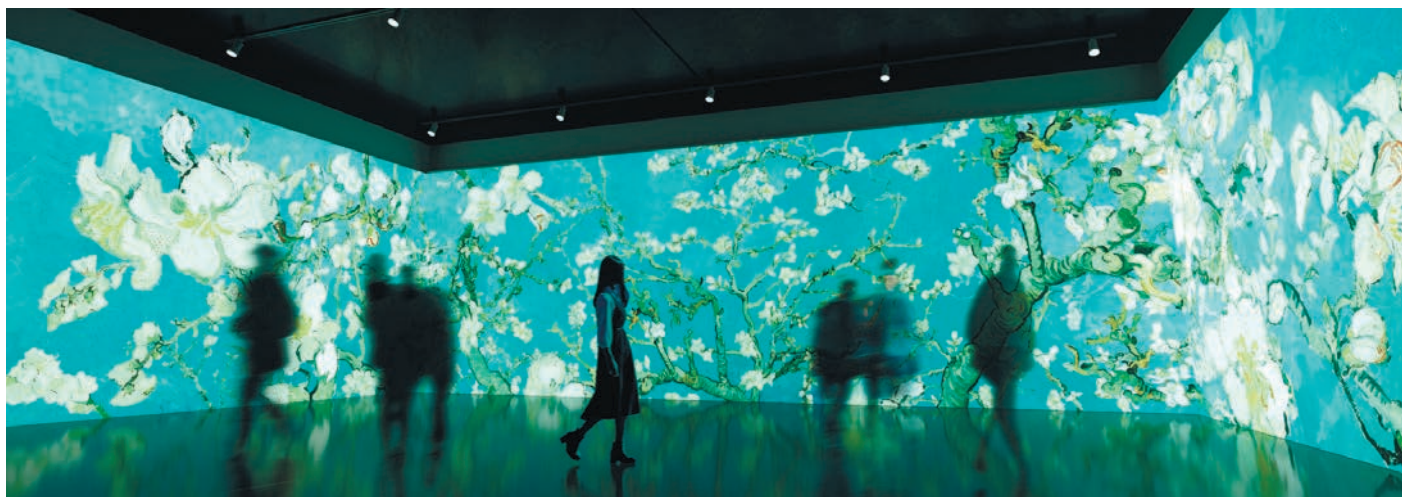
1980年代後半から1990年代前半にかけては、寄付や寄贈の恩恵を大いに受け、ときにはファン・ゴッホ作品が加わることもありました。この時期に潤沢とはいえない予算を使って購入されたのは、ファン・ゴッホと関連のあるバルビゾン派やハーグ派、象徴主義の作品です。また、1990年代の終わり頃からは版画やポスターなどの紙作品の収集にも力を入れます。このコレクションはいまや世界屈指の質を誇るものとなりました。さらに収益が美術館にも分配される宝くじができると、これまで購入が難しかった作品が購入できるようになり、印象派やポスト印象派の作品をはじめ重要な作品が加わりました。

幅14メートルを超える空間で体感するイマーシブ・コーナーを会場内に実現！

本展では、「イマーシブ(没入)」体験ができる大規模空間での映像上映も実施します。

ここ数年、世界中でファン・ゴッホの作品を題材にした没入体感型デジタルアート、いわゆるイマーシブアートが人気を呼び、特に若い世代が新たにファン・ゴッホに興味をもつ機会となっています。ファン・ゴッホは、「100年後を生きる人々にも自分の絵を観てもらいたい」と願っていたと言われています。イマーシブアートによって、彼の夢が、また新たな形で実現し、未来へと受け継がれていくことでしょう。

巨大モニターで《花咲くアーモンドの枝》など、ファン・ゴッホ美術館の代表作を高精細画像で投影するほか、3Dスキャンを行ってCGにした《ひまわり》(SOMPO美術館蔵)の映像も紹介します。絵画の中に没入することで、ファン・ゴッホの筆づかいや絵具の使い方など通常の鑑賞では気づきづらい新たな発見をお楽しみください。



イマーシブ・コーナーイメージ図

開催概要

ゴッホ展 家族がつないだ画家の夢

Van Gogh's Home: The Van Gogh Museum.

The Painter's Legacy, the Family Collection, the Ongoing Story

会期・会場

[大阪展] 2025年7月5日(土)～8月31日(日) 大阪市立美術館

[東京展] 2025年9月12日(金)～12月21日(日) 東京都美術館

[名古屋展] 2026年1月3日(土)～3月23日(月) 愛知県美術館

主催

[大阪展] 大阪市立美術館、NHK大阪放送局、NHKエンタープライズ近畿、中日新聞社

[東京展] 東京都美術館(公益財団法人東京都歴史文化財団)、NHK、NHKプロモーション、東京新聞

[名古屋展] 愛知県美術館、NHK名古屋放送局、NHKエンタープライズ中部、中日新聞社

協賛: NISSHA 後援: オランダ王国大使館 協力: KLMオランダ航空

公式サイト: <https://gogh2025-26.jp>

X: @gogh2025_26 Instagram: @gogh2025_26



《報道関係のお問い合わせ》

「ゴッホ展」広報事務局(ユース・プランニング センター内) 担当: 鈴木・池袋

〒150-8551 東京都渋谷区桜丘町9-8 KN渋谷3ビル4F

Tel: 03-6821-8808 Fax: 03-6821-8869 E-mail: gogh-ten 2025@ypcpr.com